

# 市民記者が行く！広報サポーターレポート

郷土の偉人

名裁判官 — 板倉勝重 —



広報サポーター  
鈴木正樹さん(馬場町)

市東部、貝吹のかぎ万燈【①】でおなじみの万灯山の麓にある長圓寺に板倉勝重は眠っています。勝重は、徳川家康の強い勧めで還俗し、駿府町奉行をはじめ各地の奉行職を歴任、ついには公家や豊臣家の影響力の強い上方の初代京都所司代を拝命し、

立派に勤めを果たしました。以後、三代にわたり板倉家は京都所司代職を勤めたことから、幕府からの信頼は絶大であったと考えられます。この板倉家とその菩提寺・長圓寺、京都五山送り火に通じるかぎ万燈が「三河の小京都・西尾」を名乗る一因となっているそうです。

勝重の裁きや施政について書かれた『板倉政要』などによると、京都所司代の時を含む奉行時代に、勝重は常に公正で慈悲深く、絶妙な裁きで人々の喝采を浴びたとされ、その多くが講談など



③



④



⑤

で語られる「大岡裁き」に通じるものとされています。ひとつの例が「醒睡笑」に「山伏が、ある家に宿を借りた。その家の亭主が出掛ける時に山伏の刀を一時拝借したところ、国中に徳政令（負債を棒引きにする法令）が出た。すると亭主はこれを口実に山伏に刀を返さない。困った山伏が所司代へ訴えた。勝重は「徳政の令によって、借りた刀が亭主のものになるなら、同様に山伏が借りた家も山伏のものにするべきであろう」との裁きを下した」とあります。

民としては喜ばしい限りです。東三河のある町の小学校では、80年も前から毎年、学芸会で郷土の偉人の少年時代がオペラ仕立てで演じられています。学芸会が近づくと、町の人は、話の筋もせりふも全て知っているのに、今年はその子が、どのように演じるかなど、大いに盛り上がるそうです。西尾市にも板倉勝重をはじめ、吉良義央、岩瀬弥助、尾崎士郎と、数多くの郷土の偉人がいます。市民の皆さんにも、今回のレポートをきっかけに郷土の偉人に、より関心を持っていただき、学芸会で「板倉裁き」を演じるなど、さまざまな形で語り継いでいってもらえたらと思います。

広報サポーターは、公募により選ばれた市民記者です。これからも市民の目線で、市内各地のイベントなどを取材していただきます。



①



②